

変える・守る・育てる・創る 女だから経営論

第11回

SPECIAL

夢つなぐ女性たちの集い ～十勝野の夢一夜ルポ～



取材・文／三好かやの

(みよし・かやの)

1965年宮城県生まれ。某出版社勤務の後「女性のための編集者学校」を経てフリーライターに。乳幼児から高齢者までの「ただ人のただならぬ声」を求めてインタビューを続ける。飲食店の取材を続けるうちに「生産者に会いたい」と思うようになり产地取材を始めた。共著に『日本人の老後』(晶文社)がある。

2月7～8日、十勝管内の農村女性たちが集う「十勝野に夢を育む会」主催のフォーラム「十勝野の夢一夜～夢ある農村生活を求めて～」が開催された。

参加者は、帯広を中心に十勝管内で畑作、酪農を営む農家の女性たち。さらに改良普及所や食料事務所の職員、取材関係者、さらには消費者の一員として、札幌から前北海道知事婦人の横路田美子さんらも駆けつけていた。

この会は、平成7年、代表の外山聖子さん（37歳）を中心にして10人でスタート。行政区画の枠を越えて、あくまでも「自主的な」農村女性の集まりである。現在、会員数は約80人。うち25名は農業従事者以外の「応援団」である。

フォーラムは、代表の外山さんのこんなメッセージで幕を開けた。

「今、農業、農村は、多くの課題を抱え『厳しい』とか『暗い』といったイメージでよく語られますけれども、それを克服していくのも、私たちひとりひとりの努力と研鑽にあるのではないかと思っております」

輸入自由化による、国産作物への圧迫、農村の過疎化、家族経営のもたらす世代間の確執……構造的に見ても二重、三重の厳しさ、暗さが農業を取り巻いていることは否めないだろう。しかもその皺寄せを現場で端的に受け止めているのも、生活基盤を預かる女性なのだ。けれど、それをいつかどこかの誰か——夫、家族、行政——が、何とかしてくれるのをただ待っていても埒が明かない。農業、農村の

厳しさ・暗さを跳ね返せ

中で描く女性たちの「夢」が、精神的にも経営的にも、これから農業を盛り立てていく原動力になるのだ。外山さんの折り目正しい口調から、そんな意気込みが伝わってきた。

今回のフォーラムでは、代表の外山さん、愛知県から家族の猛反対を押し切って足寄の酪農家へ嫁いだ畠知子さん（30歳）、酪農経営を母体に夫とアイスクリーム製造・販売店「ハッピネスデイリー」を経営する池田町の嶋木しづ子さん（47歳）、名古屋のOLから転身、夫の両親と鹿追町で畑作を営む、村瀬多希子さん（33歳）のそれぞれの「夢」が語られた。外山さんの活動については本誌14号の「女の視点から見る農業経営」が詳しいので、詳しくはそちらに譲るとして、ここではフォーラムのパネラーを務めた3人、そして私（三好）が取材の帰りに宿泊させていただいた、新得町のファーム・イン（農場民宿）を経営する湯浅優子さん（46歳）のことを、ぜひ紹介したい。

最初の夢を潰さぬように

パネラーの中でも最年少の畠知子さんは、車で2時間の道のりを2人のお子さんを連れての参加。時折だっこをせがむ坊やをあやしながらの講演だった。

大学時代のサークル活動がきっかけで北海道の農家に下宿する機会を得た畠さんは、あるおじいさんの「農業はプロの仕事だ」という話に触発され、さらに文通を続けていた「未来の夫」の「僕は3つ通の酪農のうち『薬農をやりたい』という

言葉に強く引かれたという。

代々教育者という家族からは猛反対を受け、また一度踏み込んだ教師の道を捨てても「夫と農業をやりたい」という気持ちを諦めなかつたのは、「やっぱり夢があるから」。ところが、結婚してすぐホームシックにかかつてしまつた。都市生活とのギャップ、農業者としてはまだ未熟という苛立ち、過疎地域の閉塞感、夫の両親との考え方の違い……。

「これが私の仕事」と決意して、非農家からやつてきて、最初の夢が純粹であればあるほど、夢と現実と折り合いかつかず葛藤してしまう。畠さんのお話からは、そんな様子がひしひしと伝わってきた。

子どもが生まれて牛舎へ足を運ぶ機会も少くなり、共に夢を描いていた夫とも共通の話題が少なくなつたと感じた頃、この「十勝野に夢を育む会」に参加するようになつた。この会には畠さん同様、結婚間もない時期に農家の生活に慣れるだけで精一杯という人、子どもが出来て育児と農業の両立に悩む人、さらにその時期を過ぎて、既に自分の農業のスタイルを見いだし、十勝野のキャンバスに新しい自分の「夢」を描きはじめている先輩たちもいる。その形は、消費者と直接結びついた野菜の産直だつたり、牧場経営と合わせてアイスクリームショッピングを開いたり、自宅をファーム・イン（農場民宿）に改造して多くの人を受け入れたり……。

同じ悩みを共有できる仲間に出会うだけでも、心の重荷が軽くなるもの。さら

いつか牧場の中に ログ・ハウスを建てたい



畠 知子さん
(足寄町・酪農)

昭和41年、愛知県岡崎市出身。愛知教育大学在学中、足寄郡足寄町で酪農を営む夫と知り合い文通を続ける。卒業後、2年の教員生活を経て結婚。農業に従事。現在は、子育てに奮闘しながら、農村暮らしのあり方を模索中。

業をしてきた人だから、本州の厳しい農業の苦労を知っている。「そんな所へかわいい孫をやれない」と、強く反対されました。でも、私は「苦労するためだけなら農業を選ばないし、やっぱり遊ぶのが大好き。そんな私は教育大に進み、ワンドアーフォーゲル部に入りました。

今年から経営が夫に委譲され、やつと自分の度量で仕事ができるので、毎日とても生き生きしています。私もしばらく育児中心の生活ですが、それで夫が経営者になつた以上「私も経営者だ」という気持ちでいた。たゞえ牛舎へは行かなくともできる仕事、農協関係の手続き、青色申告の書類作成、牛の繁殖管理……今は、膨大な事務処理を担当しています。

うちの牧場の斜面を登り切つたところにはカラマツ林があります。女阿寒岳が見える私の大好きな場所です。そこにいつかログハウスを建てて、趣味のバレーパークで夫と一緒に参加したり、講演会、勉強会にも片っ端から参加していました。「フラワーロードがきれいだな」と思えれば、自分の家の前を鍬で掘り起こして、コスモスを植えてみたり、牛乳でバターを作つたら、スプーン一杯分しかできなくて、オムレツ一回分でおしまいとか、ドライフラワー、パッチワーク、木工……とにかく「やりたい」と思ったことは実行していました。

夫は、以前から両親の下で思うように自分に發揮できない苛立ちを感じていたようです。二人の子どもが生まれ、一緒に現場に立つことがなくなり、以前のように夢を語ることも少なくなつてきました。子どもを中心の生活にストレスを感じ始めた頃、外山さんからお誘いがあり、この「十勝野に夢を育む会」に入ることになったのです。子ども連れての出席は、思った以上に大変ですが、それでも参加してよかったです。



参加者の中には、畠さんの体験談に共感する人も少なくなかつた。先輩より「大変だけど、夢を持ち続けて」と応援の声も

きました。子どもを中心の生活にストレスを感じ始めた頃、外山さんからお誘いがあり、この「十勝野に夢を育む会」に入ることになったのです。子ども連れての出席は、思った以上に大変ですが、それでも参加してよかったです。

変える・守る・育てる・創る 女だからの経営論

「畠さん、すごく苦労されましたね。私も似たりよつたりの苦労がありました。でも、農家に来て苦労する人たちの大多数は、じつと耐えちゃつて潰されてしまうんです。畠さんは潰されなくて良かった。今はお子さんも小さくて大変だと思うけど、また畠さん自身が自分の夢に向かって歩ける時が、必ず来る」

そんな先輩からのエールが投げかけられていた。

【甲斐】のある農業を

畠さん同様、非農家からやつてきた村瀬多希子さんは、名古屋のOL出身。しかも自他共に認める「ミーハー」な性格なのだそうだ。流行りのものはなんでも取り入れる感性と、「結婚しても子どもも仕事も、それも一生続けられるやり甲斐のある仕事を」という欲張な（というよりも当然の）夢が選んだ選択肢が農業だった。

迷いもためらいもなく鹿追町の畠作農家へやつてきた村瀬さんも、最初の数年は「もう、農家の生活に慣れるだけで精一杯」という日々を送っていた。しかも、共に農業をする筈だった夫は、以前勤めていた建築会社の人に誘われて再びサラリーマンに。夫の両親と3人で畠へ出るその時初めて聞きました。「野菜を入れ

実習先の牧場で主人と知り合い、2ヶ月で結婚。主人22歳、私20歳の時です。昭和52年から3800万円を借り入れ、住宅、牛舎、サイロ、土地、機械と集中的に規模拡大を行ないました。その後生産調整になつても、牛を減らさず、餌などで調節したので、2年ほど赤字状態。

夫は「これではダメだ」と、35歳でアメリカ・ワシントン州のレブレカン牧場で2週間ほどホームステイをしながら働かせてもらいました。その間残された私は、育ちざかりの子どもたち4人を抱えて両親と牧場の仕事をなんとか終わらせる毎日で、不安がいっぱいでした。

主人は本当に度胸がいいというか、常に有言実行型なのです。その後長男と再びアメリカへ行き、そこで見た乳製品加工をする牧場がとても印象に残ったと話してくれました。そして「アイスクリー

ムを作ろう!」決心したら即実行です。私はジェラートアイスという言葉すら、たアイスクリームが、本当に売れるのだろうか?」当初は200~300万円の予算でしたが、それがわざると、主人は「連続式の機械も導入する」と決意。機械と店舗の建物で最終的には5100万円という多額の借り入れとなりました。まだ牧場の借り入れも残つており、両親には反対されましたが、私はそれまでに主人のやり方を見ていたので反対しませんでした。

技術も知識もないですから、とにかく研修しなければ。兵庫の阪急デパートに従業員の子と研修に入り、ギリギリでオープンにこぎ抜けました。5月の連休、8月のお盆をなんとか乗り越え秋になると日に日にお客様が減つてきました。

「寒くなつたら温かいものを」ということで急遽パスタを出すことになり、従業員を小樽のパスタ専門店で修行させ、なんとか冬を乗り切り、1年のお客の流れをつかむことができました。

開店当時、「3日で潰れる」と言われた店も、年中無休で営業しており、今年で8周年を迎えます。結婚以来、朝起き、薪ストーブを焼き、米を研ぎ、5分か10分で牛舎に行く生活は、今も変わりありません。牛も減らさず今までどおり。そ

いつも夫と夢を追い実現させてきました



嶋木しづ子さん
(池田町・酪農)

昭和24年生まれ。中学卒業後生家の農業を手伝い、19歳の時、中川郡池田町の実習先で酪農・畑作を営む夫に出会い結婚。酪農専業に転じ、平成元年アイスクリームの製造・販売を行なう「ハッピネス・ディイー」を設立。

たアイスクリームが、本当に売れるのだろうか?」当初は200~300万円の予算でしたが、それがわざると、主人は「連続式の機械も導入する」と決意。機械と店舗の建物で最終的には5100万円という多額の借り入れとなりました。まだ牧場の借り入れも残つており、両親には反対されましたが、私はそれまでに主人のやり方を見ていたので反対しませんでした。

農家しか知らない私が、こんな事業に携わるとは思つてもいませんでしたが、いつも主人の夢を手伝う形で実現させてきました。私が夫に「お父さんの後を、金魚のパンのようにくついてきた」といえば、主人は「お母さんは見えない糸で手綱を取つている」と言われます。突進型の「ノン・シシ」とゆつくり型の「ウシ」とで、ちょうどいいかな、と思っています。



嶋木夫妻が開業した、「ハッピネスディイー」の店内。アイスクリーム、ジェラートといった高品質のオリジナル商品は、百貨店の即売会、全国宅配などでも積極的に販売

もの、

「お義母さんが、パツパツと種を蒔いて足でサッサと土をかけるだけで、ちゃんと芽が生えてくる。私が同じようにやつてもちつとも生えてこない」

年季の違ひはいかんともしがたい。まあ、それは追々年月を重ねて追いつくにしても、OL出身の村瀬さんが、なんとも納得がいかなかつたのは「農業の甲斐のなさ」である。

会社勤めの経験者は、働いた時間に見合った報酬が与えられるのは、当然と考

える。さらといい結果が出れば、上乗せされるのも当然だ。だが農家にはそうした明確な給与体系が確立していない。「お給料をあげたいとは思うけれど、農業はお嫁さん一人増えたからといって、急にその分収入が増えるわけではないで
すからね」

と、今はお姑さんの立場でもある「ハッピネスディリー」の嶋木しづ子さん。しかも非農家から嫁いですぐは、即戦力にはならないから、労働時間に見合った報酬が出せるはずもない。企業と農家、お互いを育んできた、経済観念のズレが露出するのである。そんな時、大半の若妻は「お前はまだ半人前だから」と、農家の論理に押し切られてしまうのだろうが、そこで諦めずに、自分なりの新しいスタイルを探し出したところが、村瀬さんのすごいところだ。

でも、だんだん腹が立つてきました。苦労して収穫したニンジンが20キロで500円だなんて。OL時代は、自分の労働力に対する評価、対価を必ずもらっていた。農業は同じく労働をして、天気や相場によつて値段がこーん

の言葉に、即座に「これだっ！」と思いました。

とはいつたものの、嫁いだ頃は朝取りアスバラの最盛期。家族は朝の3時から畠に出ていて、私は4時に起きても朝寝坊。それまでの生活とのあまりの違いに戸惑う毎日でした。そういううちに、事情があつて夫が再びサラリーマンに戻ることになり、私は義務父母の後をついて農作業を手伝つていました。

20歳でS&Bに就職して5年目を迎えた頃、そろそろ結婚したいけど、専業主婦にはなりたくない。子どももほしいけれど仕事もしたい。そんな時、スキーで訪れた北海道で夫と出会い、「農家の生活って、本当に人間らしい生活だよ。一緒に農業やっていこう」と

昭和38年名古屋市生まれ。短大卒業後、S & B 食品㈱へ入社。平成元年、鹿追町で脱サラし農業に従事していた夫と結婚。ところが平成3年より夫は再びサラリーマンとなる。現在は、夫の両親と3人で20haの畑作に従事

販売拠点が今では5ヶ所ほどあります。奥さんたちが「無農薬がいい」と言うので、一度本当に無農薬で作ったキャベツを見せたことがあります。もう虫の食べ残しだけでレース編みのよう。「若芽のうちに農薬をかけないと、こういうキャベツになる。野菜には淨化作用があるから、農薬も大きくなる頃には抜けているんだよ」と……全部義父母の受け売りですけど（笑）。奥さんたちも納得してくれました。

“甲斐のある”仕事がしたい 農村派キャリアウーマン



村瀬多希子さん
(鹿追町・畠作)

昭和38年名古屋市生まれ。短大卒業後、S & B 食品㈱へ入社。平成元年、鹿追町で脱サラし農業に従事していた夫と結婚。ところが平成3年より夫は再びサラリーマンとなる。現在は、夫の両親と3人で20haの畑作に従事



夫の博明さんが休みの日は、家族みんなで畠へ出る
「子育てするにも最高の環境です」

販売拠点が今では5ヶ所ほどあります。

28

変える・守る・育てる・創る 女だからの経営論

夫と共に「ハッピネスディイリー」を経営する嶋木しづ子さんも、別の形で夢を形にした女性の一人だ。昭和50年代に、酪農の規模拡大を図ったが、この先規範拡大だけでは投資が嵩むだけ。経営を安定させるためにも、何か新しい酪農経営

経営者としての ”夢”

とくつたなく笑う彼女だが、それも産直を手掛ける外山さんや、ファーム・インを実現させた湯浅さんの営みを目の当たりにしたからこそだろう。それぞれの夢が、目に見えない糸で着実に“繋”がつて“いるのがわかつた。

「お客様さんに一皿料理を出すたびに『この二ンジン……』『このカボチャは……』つていいちいち能書きを講釈するうるさい女将さんになつてるかも（笑）」

「今年はニンジンに加えてカボチャにも挑戦したい。この前外山さんの畑で採れたカボチャを食べたら、腰が抜けるほどおいしかった。あの味を目指します」
さらに10年後には、夫と共にファーム・インを経営するのが村瀬さんの夢。

「今の私には、2反が限界。だからその2反を丁寧に作りたい」

小さくとも、ちゃんと手応えある農業を。それは既存の農家にはなかつた価値観でありスタイルであり、村瀬さんが自分で見つけたものだ。これからはそんな「嫁の奮闘」が農家を根底から変えていくのかもしれない。

私の選んだ新しい農業の形 それはファーム・イン



湯浅優子さん

(新潟町・酪農&ファーム経営)

昭和25年長崎県生まれ東京育ち。23歳で農業実習生として新得町へ。翌年地元の交流会で知り合った健さんと結婚。現在は25haの農地で60頭の牛乳・育成牛を放牧主体で飼育。平成8年8月、自宅を改装し10年来的夢だったファーム・イン「つっちゃん」と優子の牧場のへや」を開業。

目に見えていた。これから先、借金を抱えながら大規模化するのか、共同法人にしようか、それ以外の道はないのか……主人と模索していましたね。そんな時出会ったのが「グリーン・ツーリズム」の道だったのです。

宿と離れた一室が客室です。あくまでもわが家の農業は、酪農が主体。それを続けながら夫と二人で無理なく経営できるようにと、宿泊客は、一日一組と決めています。4ヶ月間に60人の方がお見えになりました。

2～3人で満室になる宿泊施設ですか
ら、収入面は酪農の方がずっと大きいことは確かです。でも、牛舎や畑や牧草地、まわりの自然もひっくるめた、私たちの「へや」にいろんな人がやってきて交流を深める。それがまた私たちのやりがいにつながつて、酪農そのものにも跳ね返つてゆくのです。

これからは、経営者の個性や専門性に合

貴重な財産だと考えていました。私たちの農業にこれを生かさない手はないヨーロッパでは農家の空き部屋や、牛舎の一部を民宿やレストランに改装してそれを副業として経営するスタイルがある。それはまた、大規模化せずに農業経営を続けるための選択肢でもありましたのです。私自身、農作業が得意な

これからは、経営者の個性や特徴が合
わせた農業の形があつていいと思いま
す。畑で見つけた草花を押し花にしたり、
リースを作ったり、農産物で味噌や漬物の
牛乳でアイスクリームやチーズを作る。
みんな女性の得意分野。私のそれは、フ
ーム・インでした。本業とはまた別の
新しい農業を見つけるのは、もしかする
と女性の方が得意なのかもしれません。

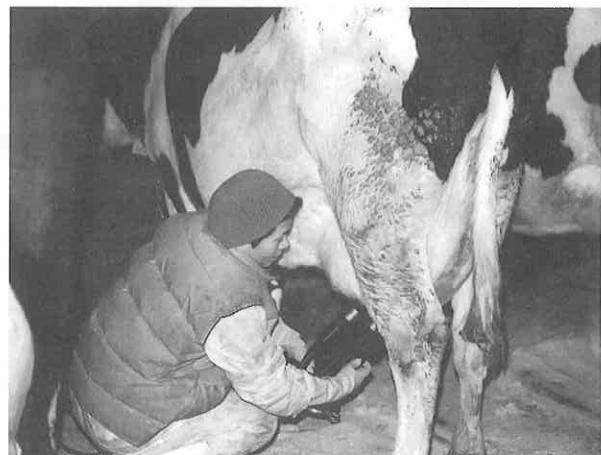
当初は、気分転換のつもりできただけ
で、一生農業をやろうとか、ここで結婚
しようなんて、思ってもいませんでした
が、実習中に地元の青年会の交流会で主
人と出会い、都会の青年にはない新鮮な
魅力にひかれて結婚したのです。



広大な牧草地の中に建つ「ファーム・イン」は絶好のロケーション。優子さんの手料理とアットホームな雰囲気がもてなしてくれる

実習生を惹きつける姿勢

また、新得町の湯浅優子さんは、自分の夢の形を、「ファーム・イン」に見いだした。



「何もセンム」の乳絞り

東京から酪農実習生として北海道を訪れ、そこで夫と出会った湯浅さんの場合

かねがね十勝の大地が織りなす景観と、農家の恵まれた環境を生かした仕事がし

たいと考えていた。そこで昨年「つっちゃんと優子の牧場のへや」をオープン。

自宅の一部を改装したひと部屋と、離

れが客室に当てられている。バス・トイ

レは母屋とは別になっていて、部屋の窓

からは広大な十勝の牧場風景が一望でき

る。実際に居心地のいい空間だ。

湯浅さんの家では、ファーム・インを開く前から、これまで10人以上の女性の農業実習生を受け入れてきました。

「いつも言つてるの。私はちつとも頑張り屋さんじゃない。普通のおばさんだつ

て。それでもここで暮らしているのが大

好きで、ファーム・インもできるんだか

ら、誰にでもできるのよ。そんな私の姿

を見て、うちへ来ていた子の半分は、農家の青年と結婚しました

そんな湯浅さんの近所に昨年「レディース

ファームスクール」が開校した。これは「将

来農業をやりたい」「農業と接点のある仕事を

したい」、そんな女性を対象に、新得町が開い

た形はないだろうかと考えて行き着いたのが「乳製品の加工・販売」の道だった。これもまた、夢には違いないが、決して「絵空事」ではすまされない。アイスクリーム製造・販売を手掛けるために、本格的な機械を導入し、デパートへ研修へ出向き、店舗を建て、従業員を雇い入れる……単独でも困難と思われるこれだけの事業を、酪農と同時進行で立ち上げた創業当時の苦労はいかばかりかと思われる。未知のビジネスに果敢に挑む、嶋木さんのご主人は、今でも全国の物産展で自社製品の売り込みに飛び回っている。「いつも主人の後を着いて来ただけ」と微笑むしそう子さんだが、常に「有言実行型」のご主人が、心ときなく前へつき進むことができたのは、ベースを守るしらず子さんの存在があつてこそだろう。今度は本格的なチーズ作りに挑戦した「い」という新たな夢を掲げ、嶋木夫妻の挑戦は続く。

た研修施設。畑作コースと酪農コースがあり、1期生は11人。研修生は学校の施設で寝起きし、受け入れ先の農家で実習を積む。年齢は19歳から34歳と幅広く、農業経験はゼロという人がほとんど。中には会社に辞表を出して、やってきた人

もいる。皆ただならぬ熱意の持ち主だ。農業を選択する女性もいる。

彼女たちはえてしてしっかりと「自分」の考えを表明して行動するタイプだから農業経営ならではの弊害や囲い込まれた農村社会の閉塞感にぶち当たってしまうこともあるだろう。恐らく彼女たちを迎えた家族にも、困惑、戸惑い、価値観のズレ……が生じていることは、想像にかたくない。

湯浅さんも研修生を受け入れているが自分で作った野菜を消費者に直接売りたいという子、故郷の山口に帰つて仲間と観光農園をやりたいという子……彼らたちは前向きな姿勢が、私たちの農業への思いを呼び起こしてくれます。これからこういう若い女性が農業の扱い手になつてくれる時代がくれば、新しい農業ができるかもしれない」

女子大生の就職が困難極まりない昨今だが、女性の雇用状況というのは、いつも景気の調節弁のごとく扱われる。一旦採用されても、単調な事務職は「一生の仕事」として続けるには飽きたらないものが多く、子育てと両立させることも難しい。

家庭に入り子育てを終えてから復帰するといつても、以前と同じ仕事とやり甲斐を与えてくれる職場があるだろうか……あつた！ 農業だ。

「結婚も子どもも仕事もぜーんぶ手に入れたかつたら、農業が一番だよ」胸を張つてそう言えるようになれば、まだまだ予備軍は押し寄せてくるだろう。

「十勝野に夢を育む会」に見た、ネットワークはそれぞれの夢と夢を繋ぐことで、都市と農村、農家と非農家、消費者と生産者の間に立ちふさがる、見えない闇をガラガラと切り崩していく、そんな

「つっちゃんと優子の牧場のへや」遠景

畠さんや村瀬さんのように都会育ちで農業体験がなくても、「やりたい！」と未知の世界に飛び込んでくる女性がいる一方で、レディースファームスクールの研修生のように、「まず結婚ありき」ではなく「自分の仕事」として農業を選択する女性もいる。

彼女たちはえてしてしっかりと「自分」の考え方を表明して行動するタイプだから農業経営ならではの弊害や囲い込まれた農村社会の閉塞感にぶち当たってしまうこともあるだろう。恐らく彼女たちを迎えた家族にも、困惑、戸惑い、価値観のズレ……が生じていることは、想像にかたくない。

湯浅さんも研修生を受け入れているが自分で作った野菜を消費者に直接売りたいという子、故郷の山口に帰つて仲間と観光農園をやりたいという子……彼らたちは前向きな姿勢が、私たちの農業への思いを呼び起こしてくれます。これからこういう若い女性が農業の扱い手になつてくれる時代がくれば、新しい農業ができるかもしれない」

女子大生の就職が困難極まりない昨今だが、女性の雇用状況というのは、いつも景気の調節弁のごとく扱われる。一旦採用されても、単調な事務職は「一生の仕事」として続けるには飽きたらないものが多く、子育てと両立させることも難しい。

家庭に入り子育てを終えてから復帰するといつても、以前と同じ仕事とやり甲斐を与えてくれる職場があるだろうか……あつた！ 農業だ。

「結婚も子どもも仕事もぜーんぶ手に入れたかつたら、農業が一番だよ」胸を張つてそう言えるようになれば、まだまだ予備軍は押し寄せてくるだろう。

「十勝野に夢を育む会」に見た、ネットワークはそれぞれの夢と夢を繋ぐことで、都市と農村、農家と非農家、消費者と生産者の間に立ちふさがる、見えない闇をガラガラと切り崩していく、そんな